

方言のことば遊び

—森田イリエ氏の「ことわざ」から—

別府大学文学部国文学科
准教授 松田 美香

① はじめに

手元に一冊の本がある。森田イリエ・安藤絹両氏の著書『庄内の方言ばなし 牛車・馬車』(2001年・私家版)である。可能表現調査でお世話になった小出弥・アサ子夫妻(大分県由布市挾間町在住)からいただいた本を、松田(2004)¹⁾では資料として使用した。その際、出来上がった雑誌を森田氏に小出氏を通じてお渡ししたことがあり、それから約2年半が経った昨年、森田氏と面談する機会に恵まれた。

森田氏は小出氏の兄嫁にあたる、94歳(平成20年1月現在)で元気な女性である。農業一筋、4人の子を育て、カラオケや詩吟が得意で、料理は町の婦人会が何度も教わりに来るほどの腕前であり、料理のレシピも長年書き溜めているようだ。人と会うのが好きということで、筆者との面談中も笑みを絶やすことがなかった。

話し合ううちに、前述の本の執筆動機には「後世に残し伝えたい」という強い思いがあることを知った。この本は「こぼればなし」「かぞえうた」「ことわざ」「方言単語」の4部から構成される片面カラー印刷(A4版)の冊子である。3年後の増補版では「ことわざ」が20、「方言単語」は4頁分ほど追加されている。「こぼればなし」「かぞえうた」「ことわざ」には現代共通語訳が付いていない。特に「ことわざ」の部は190のことわざが語り手の思いついた順(つまりランダム)に並べられており、方言が使われているものは語の切れ目さえも分からない場合がある。「洒落のよう



な感じもあり、謎のような感じもある²⁾」ことわざではあるが、そのままでは報告者にとって三割余が理解不可能であった。

そこで森田氏にお願いし、義弟の小出弥氏、実息の森田利明氏、実娘の一ノ瀬チズ子氏などの同席を得て、「ことわざ」の意味と使い方の調査を行った。

【調査の概要】

調査日：2007年9月12日、11月19日、11月30日

(1回2時間程度)

被調査者：森田イリエ氏 大正2(1913)年生まれ 女性 農業 外住歴なし

調査場所：森田イリエ氏宅(大分県由布市庄内町大字柿原)

調査方法：面接法(カセット・テープに録音および聞き書き)

調査同席者：義弟の小出弥氏、義弟嫁の小出アサ子氏、実息の森田利明氏、実娘の一ノ瀬チズ子氏。他に森田氏の次男の伸行氏、次女の宮迫清子氏2名も入れ替わり同席した。

¹⁾ 松田美香「方言性向語彙から見た大分人～室山敏昭『「ヨコ」社会の構造と意味—方言性向語彙から見る—』を読んで」『地域社会研究』第9号(別府大学地域社会研究センター 2004年) pp.19～32

²⁾ 池田弥三郎『暮らしの中のことわざ』(創拓社 1989年) p.72

今回は、「ことわざ」の中から方言を使つてのことば遊び的な要素の強いものを選び出し、当該地域における言語生活の一端を垣間見たいと思う。

② ことわざの先行研究

ことわざは、故事成語、格言、金言、しゃれことば、そして慣用句の一部を含む広い範囲を表すことができる用語である。ことわざの語源は、「言霊(ことだま)」の「言」と「災い(わざわい)」の「ワザ」の組み合わせであり、「ワザ」は神を呼び出したり招いたりする行為のことだと言う³⁾。「コトワザは言のワザ、つまり言葉の霊威のあらわれを意味する(古橋1996)」とあるが、これはあくまで語源であり、そのまま現在のことわざの定義にすることはできない。他に「万人の知恵、一人の機知」(the wisdom of many and the wit of one ジョン・ラッセル)という定義もあることを知った⁴⁾。まさにその通りで、多くの人間が感じたり思ったりはしているがうまくは言い表せないことがらを、何ともうまく表現した一言からことわざは誕生し、多少は作り変えられることはあるにせよ、ある程度の長い時を生き抜いてきたものがことわざなのである。

その形式についても興味深い言及がある。ことわざとは、言葉に何らかの威力や不思議さを伴った「短い句」形式であることは間違いない。さらに池田(1989)⁵⁾の文章の中であるが、「ことわざはほとんど皆二句形式である」という。以下に少し引用してみよう。

これは第一に形式に注意すべきだ。偶数句である。ところが、二句形式、偶数形式というのはことわざの特徴なのだ。ことわざというのは偶数形式でなければいけない。昔からそうだ。だからことわざや、今の標

語が特にそうだけれども、三句形式になると、川柳みたいになってしまう。つまり、五、七、五になったりして、調子が弱くなってしまう。

本当にことわざは二句形式でない調子が弱くなってしまうのかどうかを、この文章の後に実際に現代の交通標語などを例に引いて検証している。そこを読むと川柳や俳句の形式の標語には確かに力が無い。なぜないかをそれ以上は説明していないが、結論は間違っていないと思われる。ことわざには対句のようなものが多いことから、三句などの奇数形式とは相性が合わないのだということだろうか。

比喩もことわざにとって大切な要素である。北村(1996)⁶⁾では右脳と左脳の働きの違いから、ことわざを巧みに使う作業に対し、比喩という右脳が多く関わった作業であるゆえに、人の脳を活発に働かせることとして評価している。

ことわざに比喩が多く、比喩を用いたものをことわざらしく感じるという事実を認めるなら、その背後に別な要因が作用していると考えてみてはどうか。一中略—比喩は、あるものと他のものの関係、あるものとその部分の関係などを(暗に示す場合を含めて)明らかにしようとするわけだから、そこには何らかの思考が働いていることは間違いない。

一中略—ことわざと右脳的思考(Rモード)⁷⁾の間にはかなり密接な関連が認められる。一中略—ことわざを巧みに使う人は、単に多くのことわざを知っているのではなく、状況を自らの力でとらえる閃きがあり、機転の利く人といってよいのではないか。

ことわざの論理(感性的理論)研究というものもなされている。庄司和晃(1973)⁸⁾によると、コトワザは経験の結晶であり、「科学の世界と経験(常識)の世界の中間にある世界」であり、「一方では科学の法則に似た論理(筋)的なものがとらえられており、他方では、経験の世界の感性的な

³⁾ 古橋信孝「日本における諺の成立」『言語』Vol.25(1996年7月号)p.65

⁴⁾ 武田勝昭「『ことわざ学』の展望」注3の『言語』Vol.25に所収

⁵⁾ 前掲の脚注1と同じ 58p.

⁶⁾ 北村孝一「右脳とことわざの言語」『言語』Vol.25(1996年7月号)43p., 47p.

⁷⁾ 右脳に典型的な思考様式をRモードとし、その中の「類推的」が「ものどもの類似を観察し、比喩的な関係を理解する」とある。

⁸⁾ 庄司和晃(1973)「ことわざの世界」『コトワザ学と柳田学』(成城学園)。ただし、永野恒雄(1996)「ことわざの論理」『言語』Vol.25(1996年7月号)pp.59-64からの引用。

⁹⁾ 庄司和晃(1987)『コトワザ教育のすすめ』(明治図書)これも脚注6と同様。

ものと結びついています。感性的な論理なのです。頭の中で絵のように思い浮かべることのできる論理なのです。」これらの説明を図示した際に「感性的論理」を「比喩的論理」ともしている。

また、後年⁹はことわざにおける比喩についての説明を、ウラ・オモテの二重構造によって行っている。ことわざには全文が比喩のオモテ（表現界）だけのことわざと、比喩がないウラ（認識界）だけのことわざ、さらにその中間にある一部が比喩となっているウラ・オモテ半分ずつのことわざがあるというわけだ。それぞれを「具象型」「抽象型」「半抽象型」と名付けている。このように分類することによって、すべて比喩だけというわけでもない、しかし比喩が重要な位置を占めていることわざを、全体的に捉えられる点が優れている。

3 方言のことば遊びとしての「ことわざ」

ことわざには幾分かはことば遊びの要素があるだろう。たとえば「逃げた魚にコンメーのがネー（逃げた魚に小さいものがない）」にしても、コンメーとネーには韻を踏むという、内容とは異なるいわばことば遊び的な部分が見受けられる。今回ここで取り上げたいのは、内容的に教訓・人生訓を帯びているというよりも、どこまでもことば遊びあるいは駄洒落としか言いようのないことわざ群なのである。再び池田（1989）からの引用になるが、

貧乏稲荷で取り柄がない

お稲荷さんは鳥居が多いんだけど、貧乏稲荷だもんだから鳥居がない。これはちょっとおかしい。「トリエがない」だが、それを「トリエがない」に引っかけている。「イ」と「エ」の区別がついていない。東京のことばは、一部には「イ」と「エ」の区別がない。蠅のことを「ハイ」というし、「帰る」が「カイル」になる。みんな完全にエ東京訛りだ。—中略— この「貧乏稲荷で取り柄がない」っていうのは、つまりそのなまりの例だ。「イ」と「エ」の発音の混乱がなければ成り立たない。

というような類のものを指す。この類は形式が決まっており、「○○○で△△△」である。助詞

「で」の前の部分は「で」の後のことばを引き出すための比喩であったり、駄洒落のもとになる単語の組み合わせであったりする。本当に伝達すべきは「で」の後部だけなのだが、わざわざ前半を言うのだから、これはことば遊び以外の何ものでもないと思われる。以下、例を挙げる（方言の部分はカタカナで表記している）。

3-1. 「役に立たない人」を遊ぶ

「天下さまのセンチンジ危ノーもナカリヤ臭ウもネー（天下様の雪隠＝便所で、危なくもなければ臭くもない）」これは、人の役に立たない人のことを言うときに使うという。大分方言では助詞「で」が、しばしば「ジ」と音変化する。「アンシ（あの人）は天下さまのセンチンジャキ（だから）」という会話は「アンシは役に立たんき」に比べてみると、諧謔の味がある。センチンつながりで「センチンの火事でやけくそ」というものもある。「おはぎのおかずでアッテンヨケリヤノーデンイ（お萩のおかずで、有ってもよければなくてもいい）」も「アノ人はモー アッテン役にも立たニヤ 邪魔にもならン（あの方はもう、いても役にも立たなければ、邪魔にもならない）」というときに使う、居てもいなくてもいい人という意味のもの。同趣のもので「正油屋ンおやじで酢は作れン（醤油屋のおやじで酢は作れない）」には少し説明が必要だろう。これはやはり役に立たない人のことだが、醤油屋は酢は作れなかったことからという説明だけでは他地域の人には成り立たない。大分方言のスマツクレン人（役に立たないだめな人）を知らなければ理解できない説明である。



3-2. 「困った人」を遊ぶ

こういったことば遊びは、どうしても人や物をけなす方法として威力を発揮する傾向があるようだ。「蚤の隠居ジ飛び退いチョル（蚤の隠居で飛び退いている）」は、本来飛び跳ねる蚤が隅の方において人と交わらないから、「モー、オリヤ関係ネー」という態度の人の喩えだという。「焼きモンの巾着で口が開カン（焼き物の巾着で、口が開かない）」は、焼き物の巾着の口のように、口下手で言いたいことも言えない人の喩え。

品の移り変わりの関係で難解になったものとして、「ヒンなモンの祝言ジ長持ちがネー（貧乏な者の祝言で、長持ち（し）ない）」がある。「長持」が嫁入り道具であることから、貧乏人の婚礼には長持ちがない、さらに品物が長持ちしないという喩えと駄洒落である。「シャカンのテゴでサイ出しゃ取る（左官の手子で、差し出せば取る）」も左官の仕事が塗り壁等の塗装作業であることを知らなければ、おもしろさを享受できない。「手子」は弟子、助手という意味の方言で、お茶受けなどを勧めるままどんどん食べる人のことを、左官の助手と左官の仕事ぶりに喩えたものだ。

植物名の方言ことわざもある。「サルカケイドラでカカリガマシー（サルカケ蔓で、引っかかりやすい）」とは、「サルカケ蔓」という餅を持つために付ける葉の植物が棘を持ち、何でもひっかかることから作られたことわざである。一杯飲むと誰にでも何にでも絡んで来る人のことを、この植物に喩えたわけだ。

これらのことわざには隠語の要素が強く感じられる。しかし、単にいない人の悪口をいうだけでなく、ことば遊びの妙に思わず笑いが出て、全体の雰囲気明るくなるのが重要なのだ。森田氏になぜこのような持って回った言い方をするのかと尋ねたことがあるが、「その場が楽しくなる」という返答だった。確かに、他人の悪口をいくら言っても解決にはならない。ただの息抜きである。息抜きだったら楽しいほうがいい。ことば遊びは、困ったことを笑い飛ばす方法なのであろう。

3-3. 方言音の駄洒落で遊ぶ

先にも記したが、方言の音声特徴と密接に結びついたことわざもある。「子どものけんかで コライーコライー（子どものけんかで、堪えろ堪えろ）」は、「これはいい（物）」と「堪えろ」を掛けた駄洒落である。どちらも方言音でコライーになるからこそ成立する。「牛の爪で前から分かッチョル（牛の爪で、前から分かっている）」も、「牛の爪は前から分かれている」と、「そんなことは前からわかっている」の駄洒落だが、「分かれている」と「わかっている」が方言音で両方ともワカッチョルになるところで成立している。「ダトーさんのけんかでツユふりデータ（座頭さんの喧嘩で、杖を（露）振り出した）」の「ダトーさん」は座頭さんのこと。座頭は杖しかないから、喧嘩をしたらそれで叩き合う。そのために杖を振り出したのと、小降りだった雨（露）足が強くなって、降り出した（大降りになった）ことを掛けている。「杖を」が方言音で「ツユ」とならなければ「露」と掛けられない。これらは方言音が決め手であるから、地域で独自に作り出された可能性が高い。

方言音に関係するものだけでなく、ここまで紹介してきたものは管見ではことわざ辞典などで出典や他地域共通のものを確認することができなかったものである。郷土史などにも方言と並んでことわざを収録しているものが少なくないが、方言と同様に地域に根ざしたものが多いのかもしれない。この点については、これからさらに調べてみる必要がある。

もちろん、ことわざ辞典に記載のあるものもある。「おやじんはんてんじ手が出ラン（おやじの半纏で、手が出ない）」は、『成語林—故事ことわざ慣用句—』（旺文社1992年）に「親父の着物で手が出ぬ」がある。森田氏の説明では、相手がいいことを言ったのに対して自分からは言い返すことばが出ない、相手に敵わないときの喩えということだ。「着物」が「半纏」に変化しているのは時代が下って着物より半纏の出番が多くなったせいだろう。「おやじの」が「おやじん」、「出ぬ」が「出ラン」と方言に変わっているのは、このことわざが愛用・頻用された名残だろうか。森田氏

のことわざ190のうち、方言（と思われるもの）が使われているものは67ほどである。その中で今回取り上げたことば遊びの要素が強いものは21だが、「蚕（カイコ）の小便でクワシー」など、方言が使われていないものを含めるともう少し数が増える。

3-4. 動物の喩えで遊ぶ

動物に関係の深いことわざもいくつかある。「サメ馬ンケツでアコウデ降る（白馬の尻で、明るい中で降る雨）」というのは、日より雨のことをいう。白馬が尻尾を振って、赤い尻が見え隠れする様子が、明るい空の下で降る雨に喩えられている。ちなみにこういう雨は長雨にならないそうだ。「明るくて」が「アコウデ」になるところが方言である。「やせ牛のシリゲでハズレメがネー（やせ牛の尻繫で、外れ目がない）」は、「尻繫（しりがい）」が生活用語でなくなってしまう、理解できず、「シリゲ」となっているので、最初は「尻毛」と間違えてしまった。これは「牛馬の尻にかけて車の轆や鞍橋を固定させる緒（広辞苑第5版）」とあり、やせている牛の尻繫がしっかりはめ込んでずれないことから、しっかりした人をほめるときのことばなのである。「ハズレメ」は「外れ目」で、ものを頼んで失敗することだと思われる。それが無いのが「やせ牛のシリゲ」の人だということだと説明を聞いて、牛で物を運んだ時代が生んだことわざであることがわかった。

一番理解するのに時間がかかったのは「狐ン祝言ジ山ァ見レタ（狐の祝言で山が見えた）」である。これは『成語林』に「狐の嫁入り（山野に狐火の点滅、または天気雨のこと）」が載っていた



ことで、かえって理解が困難になってしまった。前述の「正油屋のおやじでスモツクレン」の「スモツクレン」と同様、「山ァ見レタ」という成句が先にあったと考えられる。したがって「狐の祝言で山が見えた」では説明にならないのである。同席の方々からも説明を得て、「山ァ見レタ」とは「仕事の残りがわずかになった」ときに使う慣用句だということがわかった。「今夜が山だ」というときの「山」であり、「峠」と重なる意味である。言い伝えでは狐の祝言は山で行うことから、「狐の祝言」は「山」を引き出す役割をしているのである。それで仕事の山を越えたというような時に、「もー山ァ見れたノー」ということから、このことわざが生まれたと推察される。

4 森田氏の「ことわざ」から見える言語生活

たくさんのことわざを森田氏は思い出して本にまとめた。基準があるわけではないが、覚えている量の多さには驚くばかりである。森田氏はことわざや方言単語を思い出すたびに、そっと書きとめていたようだ。そういった作業をこつこつと重ねてきたことに、敬意を表したい。博学だった父親の影響でたくさんのことわざを覚えたと教えてくれたが、ことわざも繰り返し思い出していなければ次第に忘れていってしまうものだ。調査のときも、間を空けることなく氏はことわざの意味や使い方を教えてくれた。きっとこれまで幾度となくこれらのことわざを思い出し、または口に出してきたからこそ、今日まで記憶に残っているに違いない。それでは、森田氏が頻繁にことわざを思い出してきたのはなぜだろうか。

生活の場面場面での確に状況をとらえてことわざを当て嵌めれば、それは笑いへと通じるし、気持ちをやまく静められれば腹を立ててトラブルを起こす人にならないで済む。ことわざにはそういう効用がある。笑いを創出するだけでなく的確に当て嵌めることができれば、生きる指針を示したり、トラブルを回避する方法を教えたりもしてくれるのである。森田氏は場面をことわざに当て嵌める能力の高い人だと考えられる。

しかし、ことわざには正反対なことを言ってい

るようなものがある。外山 (1979,2007)¹⁰⁾に

“人を見たら泥棒と思え”と“渡る世間鬼はない”とが共存していたりしては矛盾ではないか。—中略—もちろん、両方ともそれぞれに正しいのである。相反することがどちらも正しいなんておかしいと考えるのは石頭である。—中略— ことわざに相反する命題のものであっても、それはことわざの頭が悪いからではない。複雑な人間の現象にこまかく即応しようとした結果がそうなったのである。社会がひと筋では行かぬということだ。

とある。ことわざの本質をとらえた説明だと思う。だとすれば、ことわざにとって「当て嵌める」という技術が何より重要・肝要だということにもなる。その技術を森田氏のような人に直接教えてもらえればよいが、全員にはとても叶わないことである。そういう現実であるが、諦めてしまわずにその点を克服できるような記述の方法を工夫し、本という形で多くの人に伝えることができるのではないかと報告者は考えている。

先に見たように、生活やそれに伴う文物の移り変わりに伴ってことわざも伝わらなくなることがある。つまり、ことわざにも寿命がある。しかし、たくさんのことわざとともに生きる生活は、豊かで軽やかだ。世の中には創作ことわざの授業もあるというし、南方の島では「ことわざのひとつも作れないようではだめ」といわれるくらい、ことわざが重要な位置を占めているところもあるらしい。

今回は、ことわざの中でもことば遊びの要素の強いもののみを取り上げた。ことわざの効用の中の「笑い」の部分である。ことば遊びには方言の役割が大きいと思われる。茶の間や井戸端会議や寄り合いの席でこのようなことば遊びがかつて飛び交っていたし、今でもそういう場所があることを思うと、方言による生き生きとした言語生活が想像されるのは報告者だけではないだろう。もしも、今の日常生活が息苦しく感じられるとしたら、ことば遊びが足りないせいかもしれない。そういう場合は急に遊び上手にはなれなくとも、先人の知恵をのぞいてみるだけで、頭の中の風通しがよ

くなるのではないだろうか。

拙稿はことわざが魅力を発揮し、より長く生き残るためのささやかな助けになればと思い、広くご意見を頂くために記すものである。

なお、稿末に森田 (2001,2004) から、方言形の見られることわざを51紹介した。解説用例は森田氏から聞き取ったものである。

[付記] 本稿は九州方言研究会第25回研究発表会 (2008年1月5日熊本大学くすのき会館) において発表した「大分県由布市庄内地方に伝わることわざ」に大幅に修正を加えたものです。当日、参加者の皆様から貴重なご意見を頂きましたことを、この場をお借りして深く感謝申し上げます。

資料の提供と調査に快く応じてくださった森田イリエ氏をはじめ、そのご家族や小出御夫妻にも深く感謝申し上げます。貴重なお話を聞かせて頂けただけでなく、ここへは書き尽くせぬほどの御厚意をいただきました。

本稿にあることわざはすべて森田氏の御著書からのものです。しかし、説明の不備や間違い等は報告者によるものです。

¹⁰⁾ 外山滋比古 (2007) 『ことわざの論理』 (筑摩書房) からの引用。なお、初出は1979年に東京書籍から出ている同名書。

● 「その他の方言ことわざ」一覧 ●

- (ア) 森田イリエ・安藤絹著『庄内の方言はなし 牛車・馬車』から、方言形の見られるものを抜粋。
 (イ) 表記法は漢字かな混じり文とし、方言形と思われる部分はカタカナで表記した。
 (ウ) 共通語訳、森田氏の説明を適宜つけた。
 (エ) ◆は類似のことわざ。『成語林—故事ことわざ慣用句—』（旺文社1992年）より

方言形	共通語訳・解説・用例
逃げた魚に コンメーのがネー ◆逃げた魚は 大きい	(逃げた魚に 小さいのがない) 釣りに言った人は、皆そう言う。 何事も手に入らなかった物を美化する喩え。
死んだ子に バカゴはネー ◆死んだ子に 阿呆はない	(死んだ子に 馬鹿子はいない) 死んでしまった子は、「いい子だった」と言われる。
色が白カリヤ 七難隠ルウ ◆色の白いは七難隠す	(色が白けりや 七難隠れる) 色白なら、少々鼻が低いなどの欠点も隠れる。
子は親ン陰 麦ヤクレン陰	(子は親の陰 麦は塊の陰) 子は親が無ければ育たないように、麦も土塊の陰のほうがよく育つ。
親ボンノーに 子ツクショウ ◆親の心 子知らず ◆親の思うほど 子は思わぬ	(親煩惱に 子畜生) 「親バカ子ツクショー」とも言う。親がどれだけ可愛がっても、子はそこまで分からないので畜生のような。
若いときの苦労は 買ウテもシヨ ◆若い時の心労は 買うてもせよ	(若いときの苦労は 買ってもしろ) 他の人の仕事を自分から進んでしろ。若いときに体を使わないとだめだということ。
ジョーシキワクド 牛から踏まるル	(情識蛙 牛から踏まれる) ジョーシキ：意地っ張り、頑固、負けず嫌い 危ないと言われても聞き入れない蛙は牛から踏まれる。踏まれて舌を噛み出しているもなお、「私はベロベロをしていた」と言い張る。人から注意されたら聞き入れたほうが良いということ。
急ぐガニが 穴に入らん ◆急ぐ鼠は穴に迷う	(急ぐ蟹は 穴に入らない) あんまりせかせかとしていると、重要なことができない。気ぜわしくしている人は仕事ができない。
バケー ツクー クスリヤー ネー ◆馬鹿に付ける薬はない	(馬鹿に付ける薬はない)
食ウコタ宵に食え 言ウコタ朝言え	(食うことは宵に食え 言うことは朝言え) 食べ物は腐るから早く食べたほうが良い。言うことは少し我慢しているうちに言わなくて済むことがあるから、待ったほうが良い。生活教訓
アタランハデにヤ 負けン ◆七日通る漆も手に取らねばかぶれぬ	(触らぬ櫨には負けない) 櫨(はぜ)：触るとかぶれる植物 触らぬ神に祟りなしと同じ。



方言形	共通語訳・解説・用例
スラ信心も シブロクブ	(嘘信心も 四分六分) うわべだけの信心からのお参りでも、40~60%くらいのご利益はあるから、参ったほうがいい。生活教訓
食うシャリーシー 食わんシャリーシュー ーネー	(食べる人は元気がいい 食べない人は元気がない) 生活教訓
イヌレイヌルチュー病人は 難しい	(帰る帰ると言う病人は難しい) 入院していて「帰りたい」と盛んにいう人は帰って数日で死ぬ。生活経験
ノーデ七癖 有リヤシジューヤ癖 ◆無くて七癖	(無くて七癖 あれば四十八癖)
坊主が憎けりや 袈裟までニキー ◆坊主憎けりや袈裟まで憎い	(坊主が憎ければ 袈裟まで憎い) その人が憎いとそれにつながる人まで皆憎くなる。
阿弥陀も 銭ガナ ◆阿弥陀の光も銭次第	(阿弥陀も 銭次第) 仏のご利益も金次第。世の中万事金で決まる。
待たルルとも 待つ身ニヤなるな ◆待たるとも待つ身になるな	(待たれても 待つ身にはなるな) 人を待つのはじれったいから、待たせる立場になったほうがよい。
弱みに付け込む ビンブ神 ◆弱みに付け込む風邪の神	(弱みに付け込む 貧乏神) 悪いことが重なる。
四十二才の 二つ子に カルワルル ◆四十二の二つ子	(42歳の 2歳子に背負われる) 42歳の男性に2歳の子がいると、その子に背負われる(病身になる)。迷信。森田氏はそれゆえ4歳になるまで里子に出されて育った。
親しい仲にも カキイをシヨ ◆親しき仲に垣をせよ ◆親しき仲に礼儀あり	(親しい仲にも 垣根をせよ)
ヨバリタリウキローチ 夜グソヒリ	(夜尿垂れを嫌って 夜糞垂れ) 夜尿症の先妻を嫌って、次に嫁に来たのはもっとひどいのだった。
お茶の葉と隣の嫁は 混ぜねば出ラン	(お茶の葉と隣の嫁は 混ぜつ返さなければ出ない) 隣人が嫁を悪く言わなければうまくいく。
捕らぬたぬきの 皮ダンニユウ ◆捕らぬ狸の皮算用	(捕らぬたぬきの 皮算用)
サム小便に ヒダリ屁 ◆寒さ小便ひだるさ欠伸	(寒い時の小便に 空腹時の屁) その時の状況によってよく出るもの。頻繁に便所に行く人に言う。
一匹ダは死んデン 前田は荒らさん ◆一匹牛に前田 (は) 荒らさぬ	(家の主が死んでも 家の前の田は荒らさない) 俺がいなくなったらこの家は成り立たないと威張っている男性への言葉。あんたは偉ぶらなくていい、誰かがきちんとやっていく。牛(ダ)は家の主を比喩している。
キチゲンマラアに ハチがセエタゴツ	(うるさい人の金玉に 蜂が刺したような) ものすごく騒がしい、慌て者の喩え。

方言形	共通語訳・解説・用例
義理を立ツルよりや バリュタリイ ◆義理張るよりも頬張れ	(義理を立てるよりは 便を垂れろ) あんまり義理立てすることばかり考えないほうがいい。
人の口には トー立てられン ◆人の口には 戸が立てられぬ	(人の口には 戸は立てられない)
寝た目が 起ケイイ	(寝た目が 起きいい) 早く寝たほうが朝起き易い。早寝早起きのすすめ。生活経験
トショリと紙袋は ツムル程ヨイ	(年寄りと紙袋は 詰める程いい) 年寄りになったらご飯を食べこんだほうがいい。食べる勢いが生命力につながる。紙袋に何かいいものを貰えるときにもできるだけ詰め込んだほうがいい。
朝雨とカカーン腕まくりや オズーネー ◆女の腕まくりと朝雨には驚くな ◆朝雨女の腕まくり	(朝雨と嬢の腕まくりは 怖くない) かかあが怒っても大したことはない。朝雨はすぐに止む。どちらもそう怖がることはない。「今は違う」との注あり。
猫ン爪で コワカリがする	(猫の爪で 小分かりがする) 小分かり：人の言うことがよくわかること 「アンシノ言うコター コワカリガ スル」
犬のけんかで ガンガン	(犬の喧嘩で 引き分け) ガンガン：犬の喧嘩のようす どっちがいいということのない喧嘩の仲裁をするとき、「モー ガンガンにシヨ」と言う。
蜂のけんかで ブンブン	(蜂の喧嘩で 引き分け) ブン (分) ブン (分) だから。
やり手ンマンゴで 貰い手がネー	(やり手の孫で 貰い手がない) 偉い人の孫 (女) は縁が遠い。偉い人は気難しいから、その孫には縁談が少ない。生活体験
仏様のメシで イキを上げる	(仏様の飯で 湯気を上げる) 湯気 (ホケ) が立つうちに仏様に飯を上げなさいということ。生活教訓
マジの風とオキの浜のバーチャンは 手ぶらじゃ来ン	(真風 (南風) とオキの浜のおばさんは 手ぶらでは来ない) 沖の浜は魚どころだから、そこに親戚のおばさんがいれば何かしら魚を持って訪ねて来る。真風も気色悪い風で、雨を伴って吹くから、どちらも手ぶらでは来ない。生活体験
お寺ンお神楽ジ ネーコツがある	(お寺の神楽で 無いことがある) 神楽は大抵神社で行う。しかし時たまお寺で行うこともあることから。今までしない人だと思っていた人がいろいろしたときに言う。

方言形	共通語訳・解説・用例
見ランこと 清し ◆見ぬこと 清し	(見ないことが清い) 見なければ料理の作りようもわからないから、文句も出ない。あまり深入りしないほうがいいこと。
上に向いて ツツは吐かレン ◆天に向かって 唾を吐く	(上に向いて 唾は吐けない) 上の方に向かって唾を吐くことはできないのだから、上の人にも逆らわないほうがいい。
尻と言われてン 口とは言わレンな	(尻と言われても 口とは言われるな) 尻軽い女と言われるほうが、口軽い女と言われるよりはいい。後者のほうがたくさんの人に迷惑をかけるから。
習おうヨリヤ 慣リー ◆習うより 慣れよ	(『習おう』より 慣れよ) 習うより実際にしてみなさい。
モノダニヤ借りても 人ダニヤ借ルな	(植物の種を借りても 人の種は借りるな) 男癖の悪い女性に対しての悪口。
汗ゴイー者は 色ゴイー	(汗濃い者は 色濃い) 汗かきの人の方が元気がいい。そして色気も強い。
京のいところに 隣ガエ ◆京のいところに 隣かえず	(京のいところに 隣が勝る) 「遠くの親戚より近くの他人」と同じ。「隣ガエ」に「隣りがいい」と「隣りに換える」を掛ける?
捨ツル神ありヤ 助クル神あり ◆捨てる神あれば助ける神あり	(捨てる神あれば 助ける神あり)
親の真似はセンで シュートの真似をシヨ	(親の真似はしないで しゅうとの真似をしろ) 嫁に行った先の親の真似をしなさい。婚家になじめという教え。舅・姑をシュートと言う。
コンモンデン 針ヤ飲まレン ◆小さくとも 針は吞まれぬ ◆山椒は粒でもぴりりと辛い	(小さいものでも 針は飲めない) 体の小さい人は頭の回転がよくてしっかりしている。そのことの喩え。
トビが取らねば タカから取らルウ	(鳶が取らねば 鷹から取られる) あげなければと思いつつ、惜しくて取っておいたりすると、他の者から取られてしまったりすることの喩え。あげるべきものは最初からあげておけという教訓。
千スラ 万ー	(千は嘘 万は一) 嘘つきが千言ったことは千とも嘘。万言えばその中に1つくらいいいこと(真実)がある。「嘘つき」のこと。「アンシノ ユーコトワ モー アテニ ナランドー。センスラ マンイチ ジャ(あの人の言うことはもう当てにならないぞ。千スラ万ーだ)」と言う。